



大岡昇平集

日本文学全集 59



筑摩书房

日本文学全集 59 大岡昇平集

昭和四十五年十一月一日発行

著者 大岡昇平

発行者 竹之内静雄

発行者 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一七六五一（代表）
振替東京四二二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

大岡昇平集 目次

俘虜記

五

野火

二四四

花影

三三四

朝の歌

四一三

年譜

四九六

人と文学

五〇四

江藤 淳

口絵写真撮影
三木
淳

大岡昇平集

國破心尚在

大忌早子

俘虜記

或る監禁状態を別の監禁状態で表はしてもいいわけだ

デフォー

捉まるまで

わがころのよくてころさぬにはあらず

歎異抄

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となつた。

ミンドロ島はルソン島西南に位置し、わが四国の半分ほどの島である。軍事施設としてみるべきものなく、これを守るわが兵力は歩兵二箇中隊、海岸の六つの要地に、名ばかりの警備駐屯を行ふのみである。

5 俘虜記
私の属する中隊は昭和十九年八月以来、島の南部及西部の警備を担当した。中隊本部は私を含む一箇小隊と共に島の西南端サンホセにあり、他の二つの小隊は、それぞれ東南ブララカオ西北バルアンにあつた。サンホセ、バルアン

間、つまり島の全長を蔽ふ約五十里の西海岸の全部が開け放たれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けてゐた。しかし彼等は攻撃しては来なかつた。

昭和十九年十二月十五日、米軍は艦船約六十隻をもつてサンホセに上陸した。我々は直ちに山に入り、南部丘陵地帯を横切つて、三日の後ブララカオ背後の高地で同地駐屯の小隊と連絡した。米軍は、ブララカオには上らなかつたが、小隊はサンホセの砲声を聞き、糧食、無線機と共に予め退避をしてゐたのである。糧食は豊富にあり、まもなく我々と合流した附近水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合せ総員約二百名、なほ三ヶ月以上を支へ得るはずであつた。明けて一月二十四日米軍の襲撃を受けて四散するまで、約四十日我々はこゝに露営した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍は直ちに追求しては来なかつた。「奴等は怠け者だからこんなとこまでやつて来やしないさ。そつちが来なけりやこつちだつて行かないや。そのうち戦争も終るだらう」と我々の自分の宿舎となるべき小屋掛け作業を指揮しながら或る下士官がいつたが、これは我々の希望のかなり端的な表現であつた。即ち米軍がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、我々がこの山中にちつとして居れば、戦は我の上を通過して、こゝは最後まで所謂「忘れられた戦線」として残る可能性があつたからである。我々のやうな孤立無援の小部隊の抱き得る唯一の希望である。

しかし不幸にして我々はやはり「行かない」わけにはいかなかった。我々はやがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵偵察の命を受け、度々十数名より成る斥候が組織され、十日或ひは一週間、サンホセ附近の山中に潜伏して帰つた。或る時彼等は米哨兵に発見され射撃された。

まもなく一箇小隊はサンホセを見晴らす高地に移動して分哨となり、毎日彼等が望遠鏡で見た状況を大隊本部に打電した。彼等は屢々数十隻より成る船団がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多数新設飛行場から離陸するのは、米内火艇が引掻いたやうな白い水脈を引いて疾駆してゐた。

一月に入り大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて来た。しかし彼等の到着予定日には米軍が中部東海岸一帯に上陸してをり、彼等に乗せた舟艇は以来行方不明であつた。もつともこの斬込隊は我々の間ではあまり歓迎すべき客とは考へられてゐなかつた。何となれば彼等の到着はとりも直さず、我々の中からも若干の決死隊を出して嚮導とせねばならぬことを意味したからである。六十隻をもつて上陸した米軍に対する百五十名の斬込隊の成果について、我々は何の幻想も持つてゐなかつた。

しかし我々はその後も命令により幾度かブララカオに出張し、或ひは到着してゐるかも知れぬ斬込隊を迎へに行つた。我々は無人の民家を荒し、たまたま家財を取りに来た

不運な住民を拉致して帰つた。かうして我々は本意ながらだんだん揚蕩される原因を作つたのである。

かうした絶望の状況にあつても、我々兵士は比較的暢氣であつた。我々は尽くその年初めて召集され、三ヶ月の教育の後こゝへ送られた補充兵であり、経験の欠如から事態の重大さがびんと来なかつたからである。しかしいくら正確に事態を認識したからといつて、いつ来るかわからぬ圧倒的に優勢な相手を、毎日氣に病んでゐられるものでもない以上、かうした無智は我々にとつてむしろ一種天の恩恵だつたといふことも出来ようか。我々は大部分私のやうな三十を超した中年の兵士であり、目前の事態から強ひて早急な結論を求めようとはしなかつた。

それに山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかつた。氣候は既に乾季に入つて雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のみ着のまゝの露營生活には手頃な陽氣である。糧食も差当つて不自由なく、分隊毎に疎開分宿したから軍紀もおのづから緩んで、兵士を片苦しい軍隊の日常の作法から解放した。我々はキャンプにでも来たやうな氣持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる附近の土民（これは海岸地方に住む一般比島人より色の黒い山人で、戦争に無関心である）と馴れて、赤布、アルミ貨等を与へて芋、バナナ、煙草等を獲た。我々はまた時々は麓に下り、飼主を失つて彷徨する牛を射つてその肉を食べた。

しかし災厄は意外な方からやつて来た。マラリアである。ミンドロは比島群島中最も悪性のマラリアの発生する島ださうである。しかし予防薬をとつてゐたため、サンホセにゐる間は患者は二三名を超えなかつたが、山へ入る時衛生兵がキニーネを忘棄したので、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲撃された時、立つて戦ひ得る者三十人を出なかつた。最後の半月の間には大体一日三人づつ死んで行つた。

病人は静かに死んだ。彼等の急激な意氣沮喪は著しく、その暢気な日常と異様な対照を示してゐた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞つた。彼は小屋に充満してゐる病人を眺め、黙つて戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路の開いてゐた間に、遮二無二北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻を洩らした、彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしてゐるから、大隊本部から面倒な偵察の命令を受け、結局かうして病人が増えて動きがとれなくなつたのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判断にはルソン島を永久の安全地帯と見做す近視眼的前提が含まれてゐた。かつてノモンハンの戦鬪を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかゝる樂觀的予測を抱懐し得たはずはない。

彼は幹部候補生上りの若い中尉で、二十七歳であつたが、無口で陰気で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモ

ンハンで何をし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その眼その顔には現れてゐた。私は彼の体とその僚友の死臭を嗅ぐやうにさへ思つた。

「警備隊は警備地区をもつて墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつてゐたが、私は彼が通り一遍の訓示を行つてゐたとは思はない。

彼は我々の現在地を特に米軍から秘匿しようとはしなかつた。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を与へ放ち帰らしめた。彼の言動には一種の諦めがあり、動作はいはば過度に緩慢であつて、時々齒の間から押し出すやうに弱く笑つた。犠牲者の笑ひである。

彼は幾分進んで死を求めたやうである。サンホセ駐屯中行つた討伐戦において、彼は常に先頭に立つて戦ひ、決して自分を遮蔽しなかつた。彼は自分では戦争の要請を至上命令として自分に課することを許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感じずにはゐられない、あの心の優しい指揮者の一人であつた。彼等は一般にただ自己の死によつてしか、その部下に対する要求を正当化する手段を持つてゐない。

山中で最後に米軍の襲撃を受けた時、彼は火点観測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾を受けて真先に戦死した。恐らく本望だつたらう。

一種の共感から私はこの若い将校を秘かに愛してゐた。私もまた私なりに、彼とはかなり違つた意味においてであ

つたけれど、自分の確実な死を見詰めて生きてゐたからである。

私は既に日本の勝利を信じてゐなかつた。私は祖国をこんな絶望的な戦に引きずりこんだ軍部を憎んでゐたが、私がかれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかつた以上、彼等によつて与へられた運命に抗議する権利はないと思はれた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等に置くかうした考へ方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されて行く自己の愚劣を嗤はないためにも、さう考へる必要があつたのである。

しかし夜、関門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下の方を動いて行く玩具のやうな連絡船の赤や青の灯を見ながら、奴隷のやうに死に向つて積み出されて行く自分の惨めさが肚にこたへた。

出征する日まで私は「祖国と運命を共にするまで」といふ觀念に安住し、時局便乗の虚言者も、空しく談ずる敗戦主義者も一繋げに嗤つてゐたが、いざ輸送船に乗つてしまふと、単なる「死」がどつかりと私の前に腰を下して動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人はあり、別れは實際辛かつたが、それは現に私が輸送船上にゐるといふ事實によつて、確実に過ぎ去つた。未来には死があるばかりであるが、我々がそれについて表象し得るものは完全な虚無であり、そこに移るのも、今私

が否応なく輸送船に乗せられたと同じ推移をもつてすることが出来るならば、私に何の思ひ患ふことがあらう。私は繰り返しかう自分にいひ聞かせた。しかし死の觀念は絶えず戻つて、生活のあらゆる瞬間に私を襲つた。私は遂にいかにも死とは何者でもない、ただ確実な死を控へて今私が生きてゐる、それが問題なのだといふことを了解した。

死の觀念はしかし快い觀念である。比島の原色の朝焼夕焼、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。到る処死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒してゐる熱帯の風物を眼で食つた。私は死の前にかうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。山へ入つてからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性の秩序が取つて替つたが、それも私にはますます美しく思はれた。かうして自然の懐で絶えず増大して行く快感は、私の最後の時が近づいた確実なしるしであると思はれた。

しかしいよいよ退路が遮断され、周囲で僚友が次々に死んで行くのを見るにつれ、不思議な変化が私の中で起つた。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確実な死は突然推しのけられ、一脈の空想的な可能性を描いて、それを追求する気になつた。少なくともそのために万全をつくさないのは無意味と思はれた。

明らかにこれは周囲に濃くなつて来た死の影に対する私の肉体の反作用であつた。かうした異常な状態にあつて、肉体が我々をして行はしめるものは頗る現実的であるが、

その考へさすものは常に荒唐無稽である。

私には一人の仲間があつた。滋野は或る漁業会社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だつたが、彼は銃後の資本家のエゴイスムに愛想をつかし（と彼はいつてゐた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戦ふことを夢みた。彼は内地で教育中前線出動の可能性をわざと軍に影響を持つ父親に知らさず、自ら内地に残る手段を絶ち切つてゐた。彼の夢は前線の状況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦つてゐると判断し、「こんな戦場で死んぢやつまらない」と思つた。

この言葉は私にとつて一種の天啓であつた。この死を無理に自ら選んだ死とする倨傲が、一種の自己欺瞞にすぎないことに私は突然思ひ當つた。こんな辺鄙な山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になつて死ぬのは、「つまらない」、ただそれだけなのである。

我々は二人で比島脱出の計画を立てた。その計画とはかうである——いづれ我々が米軍によつて現在地を逐はれるのは確実として、何とか敵中を潜つて西海岸に出る。そして住民の帆船を分捕り、季節風を利用して島伝ひにボルネオに通れる（この際私が海水浴場で覺えた帆船術が役立つはずであつた）。私はボルネオも安全とはいへないから、いつそ南支那海を突切つて仏印に渡つてはどうかと提案したが、滋野はそれは食糧と航海技術の關係で不可能だから、次善を選ぶほかはあるまいといつた。

帆船が得られなかつた場合、我々は再び山に籠り、草の根でも食べて休戦を待つのである。我々は昔読んだ「ロビンソン・クルーソー」の細目を語り合ひ、土民に木から火を起す方法を学んでおいた。

この計画はいかにも空想的であるが、我々はその実現の可能性を少しも疑はなかつた。

我々は繰り返し計画を検討し、日に三人誰かが死んで行く中で、墓掘人足のやうに快活であつた（我々は實際墓穴を掘つた）。我々の最も身近な敵、マラリアに罹つた場合を考慮し、現在残つた唯一の對抗法、つまり予め体力を貯へることに全力をあげた。我々は病人の残した粥を食べ、土に落ちた飯粒も拾つて食べた。

我々はかうしてあらゆる場合に備へて周到に計画してゐたにも拘らず、ただ我々がマラリアで発熱してゐる丁度その時、米軍がやつて来る可能性に想到しなかつた。

二人共申し合はせたやうに一月十六日に発熱した。私は毎日四十度の熱が続き、二日目に足が立たなくなり、三日目に舌がもつれた。滋野の症状は私ほど重くはなかつたが、熱は毎日三十九度以上出た。

最初の試煉が来たのである。私は心に「武器を取れ」を叫んだ。私の体は強健ではなかつたが、病に対して比較的抵抗力があるのを知つてゐた。私は細心に自分の症状を観察し、療法を自分で工夫した。熱のためすぐ下痢が始まつたのを見て、消化器に無益な負担をかけないために（これ

がその時の私の考へであつた)一切食べないことにした。半月位食えずにゐても、体力を維持するだけのエネルギーを貯へてあると、私は自負してゐたのである。

衛生兵は山へ入つてから奇妙なマラリア療法を発明してゐた。つまりマラリア患者は水を呑んではいけないといふのである。私はそれまでの盲従の習慣を一擲し、断乎として反対した。あらゆる論拠をあげて、禁止の無意味なることを証明した。分隊長は怒つて兵士が私のために水を汲むことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待つてひそかに頼み、或ひは自分で十間ばかり離れた泉まで匍つて行つて水筒に汲んだ。

私は死がマラリア患者を急激に襲ふのに気がついてゐた。私は絶えず自分の体の状態を監視し、まだ死につかないのを確かめた。私はまた病人が死ぬ前に糞便を失禁するのを知つて、苦痛が激しくなると、わざと戸口まで匍ひ出して小便を試みた。

この間に一人同じ分隊の兵士が死んだ。屍体は私の胸を越えて運ばれた。分隊の全員が病人であつたから、比較的軽い病人が土葬を手伝はねばならなかつた。長らく発熱してゐて少しよくなつたと思はれた一人の兵士が、死人の装具を一町ばかり上の中隊本部まで返納にやらされた。帰つて小屋に入る時、私は彼の顔が異様に歪んでゐるのを認めた。翌朝彼は死んでゐた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱

が下り、夕方発病後初めて少量の粥を摂つた。その時展望哨が米船三隻がブラカオ湾内に入るのを見たと伝へた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか帰らなかつた。帰つても不機嫌に横になつたきり何もいはなかつた。我々は通りすがりの兵士から、直ちに四名の斥候が出たといふことを聞いた。

翌朝眼がさめて小屋の周囲が何事もなく明るくなつてゐるのを、不思議な気持で眺めたのを憶えてゐる。私は漠然とその払暁米軍が来るかなと考へてゐたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は帰らなかつた。夜私は分隊長に「今日米軍が来なかつたところをみると、僕達は包圍されてるんぢやないでせうか」といつた。彼は「病人の癖に生意氣いふな」といつた。

次の日は一月二十四日である。払暁また一組の將校斥候が出た。七時頃一人の兵士が帰つて、一行は籠で米兵に襲撃され、將校は戦死したと伝へた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ帰つて、病人は非戦闘員と共にサンホセ方面高地の分哨小隊まで退避する、歩ける者は仕度しろといつた。そして彼自身も仕度をはじめた(彼も少し前から病人と称してゐた)。

私も漸く歩いて便所へ行けるまで恢復してゐたが、分哨まで十五軒の道は自信がなかつた。その先またどれだけ歩かなければならないか知れたものではない。私は遂に自分がこゝで死ななければならぬことを納得した。

分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。そのうち私を入れて四名が残つた。滋野は行くつもりらしく仕度を始めた。私も外へ出て、何となく小屋の周りを歩きながら、彼に改めて「俺は残るよ」といつた。

彼も大分よくなつてゐた。彼は私の腋の下へ腕を入れ「大丈夫だ。俺が助けてやるから一緒に行くかう」といつた。私はふと歩けるところまで彼と一緒に気がなつた。私は分隊長に決心を変へたことを伝へた。彼は黙つてゐた。各自押し黙つて仕度をした。別れの言葉は交されなかつた。

出発の時になつた。私が皆に随いて歩き出さうとすると、分隊長が振り向いて、しかし私の顔を見ないやうにしなから「大岡、残るか」といつた。私は咄嗟に私がいかに一行の足手纏ひになるべきか、私の状態が職業軍人の眼にどう映るかを了解した。私は「残ります」と答へ、銃を下した。

滋野は何故かこの時先発して私の見えないところまで上つてゐた。その時の状況では彼を呼び返す気は起らなかつた。かうして私はこの比島脱出の相棒と、さよならもいはずに別れてしまつたのである。

この退避組は全部で六十名余りになつたが、二軒ばかり行つたところで襲撃され、ちりぢりになつた。米軍はこの時既に完全に我々を包圍してゐたのである。滋野はその晩まで分隊長と一緒にゐたが、翌朝落伍してゐたさうである（かういふことを私は後で私と同じ俘虜收容所に來たこの

分隊長から聞いたのである。彼は四名の兵士と共に一ヶ月ばかり山の中をさまよつた後比島人に捕へられた。彼はその手に残つてゐた手榴弾を投げなかつた。

残つた者の取るべき行動については、何の命令も与へられてゐなかつた。兎に角各自靴を穿き、脚絆を巻き戦闘準備をして横になつた。

私はこの時分隊で一番重い病人であつたから残るのは当然として、他の三人が出発した連中と比べて、特に悪い状態にあるとは見えなかつたのは意外であつた。

一人は衣川といふ有名な大正の講壇批評家の息子で会社員であつた。彼は常々命令された最少限度を行ふといふ頗る消極的な勤務振りを示し、上官の受けはよくなかつた。

衣川は珍らしい姓であつたから、私は或る時彼に「君は衣川先生の親類かい」ときいたが、彼は「親類ぢやねえ」と囁んで吐き出すやうにいつた。それは「親類ぢやねえ、赤の他人だ」とは受け取れない妙な返事であつた。私は「息子だな」と感じたが、その返事が気に入らなかつたから追求しなかつた。しかしサンホセに米軍が上陸する直前私が最初の発熱をした時、彼も足を傷めて班内にゐたが、飯盒に水を汲んで来て丁寧に私の頭を冷やしてくれた。その看護には女のやうな奇妙な優しさがあり、彼の不漸の人に馴れないエゴイスチックな態度とは似合はなかつた。私が前の質問を繰り返すと彼は素直に次男だといひ、問はず語りに彼の父が震災で不慮の死を遂げてから後の、一家の歴史

を細々と語つた。以来我々は友人となつた。しかし彼は私と滋野の脱出計画を冷笑してゐた。

彼ははつきりしたマラリアの症状を示さず、仮病ぢやないかといふ者もあつた。少なくとも出掛けた滋野よりは遙かにいゝ状態にあつたのは事実である。彼は口を曲げて「行つたつて残つたつて同じことさ」といつた。彼は心は優しいが、幾分自分を粗末にする男だつたやうである。

他の一人は土木師であつた。彼はサンホセ駐屯中上官の前でよく働き、屢々上等兵の勤務をとつた。私は彼を阿諛者として嫌つてゐたが、山へ入り最早序列も昇進も問題でなくなつた後も、依然としてよく働き、進んで重い物など担いだ。そして恐らくそのため分隊で一番先に病人となつたのである。私はこの齡になつても、まだ人を見る眼に誤りがあるのを秘かに愧ぢた。彼はもう熱はなかつたが、多分体が見掛け以上に弱つてゐたのであらう。

もう一人はおとなしい北多摩の百姓である。彼は行くとも残るともはつきり意志表示をせず、ただ皆が出掛けた後で、見たら彼がそこゐるといふにすぎない。彼はべそをかいたやうな顔をして、脚絆も巻かずに壁に向いて寝てしまつた。

時刻は残留者が誰も時計を持つてゐなかつたので、はつきりしたことはわからない。私は通りかかる兵士に飯盒に水を汲んで来て貰ひ、何度もそれを水筒に詰めようとして、億劫で止めたのを憶えてゐる。物音はなかつた。兵士もだ

んだん通らなくなつた。

突然、谷の下の方から三発の鈍い発射音が聞え、少し間をおいて中隊本部の山の上で、三発の澄んだはじけるやうな音がした。

小銃の音ではなかつた。私はそれまで迫撃砲の音を聞いたことはなかつたが、何故かこの時迫撃砲ときめてしまつた。しかも弾着を見るための試射の音であると思はれた。皆起き上つた。表情のない顔であつた。「来たらしい——兎に角上まで行つてみようか」と私はいつた。皆「うん」と答へて身動きを始めた。

私は飯盒の水を水筒に移さうとした。手が震へて水は外へこぼれた。私は「死ぬのに水は要らねえや」と呟き、飯盒を遠く投げ飛ばした。

私の友人は屢々私が事にあつて見切りがよすぎると非難したが、私が今日生きて帰つてこんな文章を書いてゐられるのは、ひたすらこの時この水を棄てたといふ一事に懸つてゐる。

私はなるべく身軽に身をこしらへて外へ出た。弾入も一個しかつかなかつた。その時の私の感じでは、私の生命はその三十発を射ち尽すまでは持たないのである。

他の三人はまだ中でごそごそやつてゐた。私は中隊本部まで一町の坂道を上れるかどうか自信がなかつた。私は「先へ行くぜ」と声をかけて歩き出した。

「一緒に行かないのか」と衣川が不服さうにいつた。私は

「歩けるかどうかかわかんないから、先に行く。多分途中で待つてるよ」といひ棄て、銃を杖に狭いジグザグの坂道を上り始めた。これがこの連中の見収めとなつた。身ごしらへに手間どつてゐた彼等は、一人もこの米軍の砲撃正面となつた谷から出られなかつた。

私は不思議に歩いて途中休みなしに上り切ることが出来た。上ではみんな活潑に動いてゐた。二三人づつ隊伍を組み、緊張した顔を連ねて、無言で右左に摺れ違つてゐた。私は稜線を越えたところにある一つの分隊小屋に入つて腰を下した。二三人の病兵が銃を抱き、顔を歪めて横はつてゐた。

途端に小屋は炸裂音に包まれた。私は反射的に小屋を出て弾の来る方角へ伏せた。今私が上つて来た谷の方角である。炸裂音は続いた。「前へ出ろ、前へ出ろ」といふ声が聞えた。(この時私達の位置から十米後方の衛兵所に弾が落ちて、一人の兵士が大腿骨を砕かれたのである)。私は匍つて前へにじり出た。炸裂音はなほ前方で激しくしてゐた。私は前進を中止した。「前へ出ろ」の聲は続いた。

中隊長が出て来た。彼は背負つた鉄兜の上から上衣を羽織り、僂儷のやうな恰好をしてゐた。彼は「賑やかでない、ぢやないか」と笑ひながら双眼鏡を持ち添へ、弾の来る方向へ、映画の画面を横切る人のやうに歩いて消えた。これが私が彼を見た最後である。

二十人ばかりの兵がそこらに伏せてゐた。私は隣りの兵

士と顔を見合せた。熱病患者らしく蒼くふくれてゐた。その顔も笑つてゐた。

弾はまだ一しきり激しくなつて依然前方に落ちた。それから止んだ。

「隊長殿がやられた」といふ声がし、「衛生兵」と呼ぶ声が続いた(この衛生兵も後で收容所で会つたが、彼は中隊長の屍体を見付けることが出来なかつたといふ)。

先任軍曹が来て、「病人は谷に降りろ」といつた。私は今しがた休んだ小屋へ行つて病兵を促がした。彼等は私が最初入つた時と同じ姿勢で寝てゐた、そして聞えるのか聞えないのか、身動きもしなかつた。

我々は私が登つて来た谷とは反対側の谷へ、一列になつて降り始めた。病人でない者も皆降りた。私の前には先任軍曹が歩いてゐた。「隊長殿がやられた」といふ声が後でした。私は私の前を、何の反応を示さずに動いて行く軍曹の背中を、不思議な生物を見るやうな氣持で見続けた。「軍曹殿、隊長殿がやられたさうですが」と注意したが、軍曹は振り向かず「さうか——ほんたうかなあ」といつて、歩度を緩めずに降り続けた。

谷を下りた所に別の軍曹が腰掛けてゐた。先任軍曹は傍へ行つて「隊長殿がやられたつていふんだが、ほんたうかなあ」といつた。「ふーん、ほんとかなあ」鸚鵡返しに相手は答へた。

彼等の会話は聞くに堪へなかつた。私がそこを離れよう

とすると「みんなあつちへかたまつて、命令を待つてろ」といつて、谷の向うの空地を指さした。

そこには既に三十人ばかりの兵士が集つてゐた。病兵が道傍に倒れてゐた。或る者はうつ伏せに死んだやうに倒れ、或る者は銃を横に抱いて「く」の字形に寝てゐた。右手は弾倉に当てられ、弾を押し込まうとして力を失つてゐた。弾が地上に散らばつてゐた。私はその弾を込めてやり、兵士の体を揺すぶつたが、彼は眼をあかなかつた。

「安全装置したか。暴発するぞ」と通りがかつた兵長が怒つたやうな声でいつた。

空地に集つた兵士の中に伍長が一人混つてゐた。「命令を待つて」といふ軍曹の言葉を伝へると「けつ、命令なんか待つてゐられるか。俺がうまく逃がしてやるから、みんな来い」といつて一方の道をどんと上り出した。私は機械的に行つた。上りは辛かつた。私がずつと後れて半町ばかり上り、一息ついてゐると、一行はどやどや引き返して来た。伍長は血走つた眼をして「駄目だ。こつちも撃つてやがる。あつちから行かう。あつちも駄目だつたら、銃座へ立籠つて、最後の一戦を交へるまでだ」といひながら摺り抜けて行つた。見知らぬ海軍の兵士が私を見て「しつかりしろ」といひ棄てて続いた。

私はぼんやり彼等の後を見送つてゐた。私はこゝまで上るのに力を使ひ果してゐた。一緒に行かうか、ついて行けるだらうかと思案しながら、私はそこに腰を下ろしてしま

つた。

一隊ははずんずん下りて横へ切れ、林へ入つてしまつた。それはこの谷を少し上つてから別の尾根へ取り付き、先で今彼等が引き返して来た道と合する道である。私はその道を知らなかつた。

また一隊の兵士が足早に空地を横切り、林に吸ひ込まれて行つた。私はその中によく私のところへ身上話をしに来た、或る若い兵士の姿を見たやうに思つた。彼もマラリアで寝てゐたはずである。その兵士の姿が私にまたいつて行く氣を起させた。私は思ひ切つて立ち上がり、下りて行つた。

空地には倒れた兵士の外誰もゐなかつた。林の中には道はなかつた。前方では兵士等の呼び交ふ声が響いてゐた。声はどんとん遠ざかり、やがて呖くやうな音となつて止んだ。その遠ざかる速度は私の到底いつて行けない速度である。

私はまた腰を下ろした。そして「わかつたよ。もう沢山だ。わかつたよ」と呖いた（かうして一人になつてから、私は始終声を出して考へてゐた。恐らく自分の考へを自分に確かめるためだつたらう。「わかつたよ」とは「どうせ俺はこゝで死ぬことにきめたんぢやないか。思つたより歩けたからいつて来たものの、どうせ皆と一緒にには行けないんだ。わかつたよ」といふ意味である。

私は柵に似た大木の根元に身を横たへ、おもむろに腰の